

豊かな人生——榊原胖夫さん

（同志社大学名誉教授）

新聞に載った「榊原胖夫氏（三中三十七回）の豊かな人生」を見て、編集部で一度訊ねてみようということになり、アポイントメントをとり、渡辺（三中三十七回）、高宮（三中三十八回）、高林（三中三十八回）、三中西（山城四回）の四名で周山に向かった。

途中、美しい北山杉が四人の目を和ませた。車で一時間ばかり、櫻で有名な常照皇寺のとなりが榊原氏の家である。

夫人がよんどころない事情で不在、榊原氏と二番目のお嬢さん、榊原彩さんが迎えてくださった。榊原彩さんはパリ在住のチェリストである。夫君は郡山市（福島県）出身で、おなじくパリで活躍中のピアニスト、向山良作氏。九月に郡山市でコンサートを開催されるので、ひと足先に帰国しておられたのである。

「お疲れでしたでしょう」

と彩さんからフランスの紅茶をご馳走になった。

榊原氏と高宮・高林両氏は三中体操部で一緒ということで話は最初から盛り上がった。

太い梁、頑丈な大黒柱の旧家は訪ねていった四人を古きよき時代の日本に戻してくれた。あつという間に時は過ぎ、昼食時になり、編集子たちはお嬢さま手作りの料理に舌鼓をうった。その間も話は途切れることなくつづいた。

榊原氏は海軍兵学校七十七期だが、江田島で広島のパカを見たということだった。フルブライトの留学生として氷川丸で渡米したが、ハイウェイを車がビュンビュン走っているのをみた時は激しいカルチュアショックをうけたという榊原氏の話に四人は聞き入った。

食事を終えた時、榊原氏はお嬢さんを

「有り難う、おいしかったよ」

とねぎらわれた。

その姿勢に四人は国際人、榊原氏の片鱗を垣間見た思いがした。

あと広い庭を案内してもらった。猿、猪、鹿までくるというのでここに防護ネットが張り巡らされていた。

草花から野菜果物まで榊原氏は丹精こめて作っていた。

まさに『豊かな人生』そのものだった。

いつまでもいたかったが、そうもいかない。陽がかげりはじめた時、

「蛭が戻って来ました。次は是非蛭をみにきてください」と榊原氏に送られて四人は帰途についた。

充実した一日だった。

これも三中・山城高百年誌の編集に携わっている者の余得といっている。